

◆2021年12月第4週の礼拝奨励

- ・12月26日（日）降誕節第1主日
- ・奨励：入江玲子姉
- ・奨励題：「神の導きの中に一愛する両親の歩んだ道」
- ・聖書：ヨハネによる福音書14：1-7（p196）
- ・讃美歌：155「山べにむかいて」・463「わが行くみち」

はじめに

飯島先生から奨励の担当をしてほしいとのメールに、「断ってもいいかしら」と返事をしました。しかし、何か月後に「再度のお尋ねです」とのメールをいただいた時、私はすぐ「了解しました」と返事をしました。それは、あのメールの二日前に、あるテレビ番組を見たからです。「鉄道、絶景の旅、大井川鉄道」という番組でした。

徳山での医療と伝道

テレビで放映された静岡県の大井川鉄道の車窓からの景色は、とても素晴らしいものでした。特に、SL車両と周囲の景色は、なんとも風情のある景色です。しかし、私はその素晴らしい景色よりも、私の両親が東京にいる私たち兄弟姉妹や孫たちに会って、一緒に家庭礼拝するために、その電車に乗ってきたことをとても懐かしく思いました。私の両親は大井川鉄道の沿線にある人口1485人の小さな村、駿河徳山に住み、18年間に渡って、医療伝道をしました。親が駿河徳山に来る前、その村に、診療所こそはありましたが、医者はいませんでした。この村の住民は病気になると、鉄道や自家用車に乗って何十分も離れたところの病院に行くのです。1979年に、母はこの診療所の医師として赴任しました。父は、診療所の奥にある自宅を開放して伝道所として、日曜日でも平日も、神様を信じたい人たちに聖書を教える開拓伝道をしました。その時に使った聖書勉強会の机は、今、立川教会の台所にあり、皆さんが大切に使って下さっている、その机です。

日本に来たきっかけ

1974年、京都アジア福音宣教会総幹事の野口福秀牧師が牧師である父に、「日本の無医地区、いわゆる「無医村」、お医者さんがいない村の医師不足を解消するために、多くの台湾人のクリスチャン医師が援助に来ています。しかし、そのような地区の殆どは、教会がありません。その台湾人医師たちの信仰を助るために、宣教師として日本に来てくれない

か。」との相談話がありました。ほぼ同じころに、医師である母の恩師から、日本のお医者さんのいない地域の医師不足が深刻であるとの話の中で、「あなたが来てくれたらどんなにうれしいか」と言われました。また手紙で母に「あなたが日本に来られることを切に願っています。」と書いて送ってきました。このようなお言葉があるゆえ、父はアジア福音宣教会の宣教師として、母は和歌山県高野山病院の医師として招聘され、私たち家族六人は断続的に台湾を離れ、日本に来たのです。

両親の日本での働き

日本に来た両親は、最初に住んだ場所は和歌山県高野山病院の医師寮でした。父は、日本の医者さんのいない地域に赴任して来た 200 人ほどの台湾人医師に手紙や電話で信仰の励ましを行い、時には相談相手にもなり、さらに家庭訪問をもしました。それまで産婦人科医であった母にとって、医者さんのいない地域での診療は、専門外の内科や整形外科の知識も必要になりました。そのために、母は、出身大学の東京女子医大に研修に出かけ、また和歌山県立医大の医師との交流をも築きました。それが功を奏して、診療にはそれほど戸惑いはありませ

んでしたが、しかし、年中 30 度近くある暑くて、にぎやかな台湾から、いきなり高野山という寒い山奥、いわゆる、僻地に来た母がいかに寂しく、心細かったかと思えます。高野山の雪道に慣れない母は、「牧の羊」の本にこう書いています。「道の両側の幾百年もの樹齢を持つ大きな高い杉の木立が、雪の重さで垂れて下がって。両側から頭を下げ覆いかぶさり、暗い空を背に巨人が今にも、こちらに向かって襲い掛かってくるように見えて、一步もあるけなくなってしまうのです。」また、母は「愛する徳山」の本に田舎の夜中の往診についてこのように書いています。「都会育ちの私は暗い農村の夜道は苦手ですので、ナースに手を引かれて往診をしました。」

冬が厳しい和歌山県高野山で四年間の勤務を終えて、両親は静岡市から車で一時間半ほど離れたところの、温かい、お茶畑などの田園風景に満ちた先ほどお話した大井川鉄道の走る駿河徳山に赴任したのです。

台湾での医療伝道

台湾南部に嘉義という人口 30 万程度の町があります。日本に来る前に、父は台湾キリスト長老教会の嘉義中会の 53 ある教会を束ねる総幹事をしていました。母は産婦人科医と

して嘉義で開業をしていました。大きな立派な家を建てて、自宅用と中会の牧師たちが会議できる場所を提供していました。1960年、今から61年前、台湾にはまだ国民健康保険制度がなく、病院にかかることは難しかったそうです。特に沿岸地方の村人は貧しく、体の具合が悪くなると、薬局で薬を買ったり、薬草を採って煎じて服用したりしたと聞いています。ある日、父が母に、沿岸地方の貧しい人たちに対して、医療をしつつ伝道したいと提案しました。また、いま手元にある資金なら、三ヶ月間の無料診療ができるだろうと話しました。そして、このようにして、神にも、人にも喜ばれる奉仕が始まり、多くのクリスチャン医療従事者が加わりました。無料診療日になると患者は朝早くから長い列を作りました。診察を待っている人々の間に、父は賛美歌を教え、神のメッセージを伝えました。もちろんすべてが順調とはいきません。人員や資金に困るときも多々ありましたが、そういう時は、いつも父はスタッフを集めて祈りました。なんと不思議なことに、薬がなくなる直前に、アメリカの教会から大量の薬が送られて来ました。また、沿岸のデコボコ道を走る古い車が故障しがちでしたが、ある日、ドイツの教会からフォルクスワーゲンの新車が送られてきました。このようにして、多くの人たちの愛と祈りによって、医療伝道が継続され、政府がその地域に医療施設を開設するまでの九年間、神様の恵みによって三か月分の資金だけで続けることができたのでした。

父の生涯

仏教家庭の11番目の子どもとして生まれてきた父は、生まれつき心臓が悪く、医者に見放され、(103年も前のことですから)親もすっかり諦めているときでした。教会の牧師がこの仏教信者、しかも信者代表である檀家総代、仏具店経営の祖父のところに訪問してきま

した。大胆に聖書の話をしました。「信仰による祈りは、病んでいる人を救い。そして、主はその人を立ち上がらせて下さる」(ヤコブの手紙5章15節)と聖書を読んで、人間の命は神の御手にあって、すべては神の摂理であることを、分かりやすく熱を込めて話しました。その後、父の両親はクリスチャンになり、檀家総代を辞め、仏具店を廃業し、店にあった仏具や線香などをすべて処分しました。そのため隣近所や仏教信者との付き合いが難しくなり、生活するのも厳しくなりました。けれども祖父母の信仰は、この苦しみの中でまし加えられ、家族みんながクリスチャンへと導かれました。と母の著書「牧の羊」に書かれています。

父は80年の生涯に、多くの病気に悩まされましたが、神様が父の健康管理のために医師の妻を用意してくださいました。父は80歳の夏のある日、いつものように一日を過ごした夕方に、近くにいる母に「ママ、早く来て、見て、あの空があんなに綺麗」と言って、母によりかかり倒れました。これが最後の言葉でした。

結び

ヨハネによる福音書14章の御言葉を思い出します。「私の父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻ってきて、あなたを私のもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。・・・わたしは道であり、真理であり、命である。」

私の両親は、見知らぬ日本の僻地に赴きましたので、心細さがあったと思いますが、毎晩の家庭礼拝に祈り、賛美をしました。最後に、家庭礼拝でよく歌う賛美歌を今歌いたいと思います。賛美歌第二編 157 番

この世のなみかぜさわぎいざないしげきときも

かなしみなげきのあらしむねにすさぶときにも

みまえにつどいいのれば悩み去り憂きは消ゆ。

いざともにたたえうたわんめぐみふかき主のみ名

ひとつの望みに生くるはらからともにつどい

たがいにつかえむつめば世になき安きみちて

あめなるよろこびあふるうるわしかみの民よ。

いざともにたたえうたわんめぐみふかき主のみ名